エクエス・エト・プエッラ

柴田朋紅

――ここまでのあらすじ――

クエルチア王国の騎士・ラウルスは冒険の旅から帰還する途中でサンセール村に立ち寄るが、村は盗賊騎士によって壊滅させられ、村人達は皆殺されていた。しかし、そこでラウルスは地下牢の中の少女・ヴェルジュを見つけ、彼女を保護して生まれ育った村へと帰ることにした。その道中、ヴェルジュが豊穣の儀式で生贄として死ぬ運命であったことを知り、ラウルスは彼女の「記憶の消去」という願いを叶えるために、父親であり魔法使いでもある「ミラ・メンス」に会うことになる。

ラウルスの故郷・モデストゥス村の奥にある、テンプルムの森の中にあるミラの家で、ヴェルジュは自らの願いをミラへと述べる。だが、彼に告げられたのは「願いの否定」……そして、ヴェルジュが五百年もの間転生を続け、そのたびに十五歳で生贄として死に続けていたという事実だった。ミラはヴェルジュに「大切なことを忘れている」と語り、それをラウルスと共に探してくるように告げて、魔法によって二人をモデストゥス村へと送り出した。

ヴェルジュ達は一晩をモデストゥス村で過ごすことになるが、村人達やラウルスの騎士としての師・モンターニュ侯の屋敷の使用人たちと関わるうちに、ヴェルジュはラウルスが「いつでも優しい、人々から好かれる人間」なのだと、そう思い込めるほどに彼の優しさに惹かれていく。だが、彼の兄弟子であり村を壊滅させた張本人の盗賊騎士・ブランとの対峙、冒険に必要な荷物を揃えるために向かったクエルチア王国の都市・プラエクラールムで見聞きしてしまった、ラウルスの同僚の騎士達による「魔法を使う異質な騎士・ラウルス」への讒言、そして偶然再会したモンター

ニュ侯との会話の中でラウルス自身の口から出た「救えなかったこと」という言葉から、図らずも彼の心の闇を知ることになってしまう。

その後、気まずい空気のまま二人は舟渡に頼んで川を渡って旅をしようとするが、舟渡がブランによって殺されていたために、仕方なく敵対国であるランダ帝国を経由することになった。しかし、どうやらラウルスはランダ帝国を通ることに乗り気ではない。ヴェルジュはそのことが気になりつつも、途中の荒野で野宿を挟み、ランダ帝国の入口にたどり着く。そこでラウルスと門番の一人との間にひと悶着が起きるが、別の門番によりラウルスが「大魔法使いミラ・メンスの息子」であるという事実を知らされると、態度が一変した。ラウルスはそのことに呆れながらも、妻と間違えられたヴェルジュと共にランダ帝国の門をくぐる。

ランダ帝国の都市内は活気に満ち溢れていた。活気があるという点ではプラエクラールムもそうだが、同じように見えて、何もかもが違う雰囲気をまとっている。これが文化の違いなのだろうか、とヴェルジュは思う。

「……すごいわ」

「プラエクラールムもいいところだけど、悔しいことに、この都市もいいところなんだよな……」

ヴェルジュの呟きに、ラウルスも同意する。

プラエクラールムは二人が通った城門の反対に抜けるともう一つ街道があり、そこを歩いていくと港町がある。しかし、プラエクラールム自体は辺鄙な場所に位置し、クエルチア王国の首都であるディエースからは一番離れている上に、他国との距離も遠い。たまに遠い国の文化が港町から入ってくることはあるが、その情報量は多くなかった。

だが、ランダ帝国は「他国への侵略」という理由ではあるが、様々な国の文化が融合して、そして個性を放っている。さらに、耕作のできない荒野から発展していった反動か、農業が非常に盛んであり、麦や農作物を使った料理が数多く考案されているらしく、街には香ばしい匂いが漂っていた。

ヴェルジュは初めて見る物に目を輝かせ、ラウルスは何か不安そうな表情を浮かべているところに、一人の女性が現れる。まさに美女、といった容姿だ。

「ラウルス様、そして奥方様。ようこそランダ帝国へいらっしゃいました」

肩まで伸ばされた金色の髪と切れ長で緑色の瞳が美しい女性は、役人などの衣装とはまた違うものを着ていた。髪飾りなど最たる

ものだ。光沢のある金属で作られており、側頭部に沿って一周回り、反対側の同じ場所まである。その装飾も、金属の紐から数個の珠がつながれたものを髪飾りの一周分つけた、変わったものである。何かの儀式に使うようなもののようだ。年齢は二十歳ほどに見えるが、彼女はどことなくミラと雰囲気が似通っている。

「もしかして……宮廷魔法使いか?」

ラウルスが女性に問いかけると、彼女は頷いた。

「はい、わたくしはランダ帝国所属の宮廷魔法使い、魔法使いの隠れ里より宮仕えいたしております『プルウィア』と申します。以後お見知りおきを」

恭しく、しかし物腰柔らかな言葉で挨拶をした「プルウィア」はペコリと頭を下げる。ラウルスはその態度を見て、はあ、と大きくため息をついたが、ヴェルジュにはその理由が分からない。

「ずいぶん暇なんだな、ランダ帝国の宮廷魔法使いっていうのは」

ラウルスにしては、非常に嫌味な言い方である。ラウルスはランダ帝国を嫌っているような態度だ。しかし、嫌味ではプルウィアも負けてはいなかった。

「ラウルス様、あなたはもう少し自覚を持つべきです……偉大なる魔法使い『ミラ・メンス』の息子という自覚を」

びく、とラウルスの身体が震える。どこかその表情も硬く、そして青くなってきている。まるでプラエクラールムにいた時のようだ。ヴェルジュは心配そうにラウルスを見る。何か言いたかったが、何も言えず、三人の間にはただならぬ空気が流れる。

しかし、そんな空気を払うかのように、プルウィアはふう、と一つ息をつく。

「……というのは、ランダ帝国としての見解ですので、どうぞわたくしの前では『騎士・ラウルス』としてお過ごしください」

ラウルスは呆気にとられる。その言葉は本当に魔法のようだった。たちまちラウルスの表情はいつもの顔色に戻っていく。

「ですが……皇帝の命令には逆らうことができません。あなたには最低でも三日はこの都市に滞在してもらいます。否が応でもこのランダ帝国の素晴らしさを知ってもらいましょう」

「すごいな、なんて横暴だ」

プルウィアは「騎士・ラウルス」として過ごせと言っておきながら、平気な顔でそう言い放ったため、ラウルスは真顔で呆れながら呟いた。ラウルスと彼女はどうやら初対面だが、二人の会話にはあまり遠慮というものがない。

二人はどこか通じ合うものがあるのかもしれない……ヴェルジュはそう思ってから、ラウルスと何かを言い合うプルウィアを見て、複雑な気持ちになる。ヴェルジュの視線に気が付いたプル

ウィアはヴェルジュの方を向いた。
「ところで……先ほどは兵士の報告通りに『奥方様』などと言ってしまいましたが、違いますよね？　あまりにも幼すぎる」
　その思いがけない言葉にヴェルジュはむっとした。本人には悪意がないのだろうが、十五歳の乙女（レディー）に言うようなことではない。そう、十五歳なのだ。この世界ならば結婚していてもおかしくはない年なのだから、幼いと言われては心外だろう。ラウルスはそのことを理解しているかどうかは分からないが、少なくとも、たった一言でヴェルジュのこの表情を引き出すプルウィアにむしろ感心してしまった。
　プルウィアは宿に案内すると言って二人の前を歩き、人の間を縫っていく。ラウルスとヴェルジュは自然と彼女についていく形になるのだが、ラウルスはプルウィアを訝しく思っているようだった。やがて、人がはけた宿街の通りへと差し掛かる。
「そういえば、なんで宮廷魔法使いが俺達についてくるんだ？　まあ今ついてっているのは俺達なんだけど」
　人がいないことを確認して、軽口まじりでラウルスはプルウィアに問いかけた。プルウィアは歩きながらラウルスとヴェルジュの方に顔を向けて、その問いに答える。
「わたくし自身が、護衛と世話役に名乗り出た、それだけです」
　その答えを聞いて、ラウルスはさらに不信感が募っているようだった。
「それぐらいは分かる。俺が訊いているのは、なんでそれなりの身分である『宮廷魔法使い』ともあろう者が、一介の騎士なんかの護衛に名乗り出たんだ、ということだ」
　プルウィアはいきなり立ち止まり、ぐるりとラウルス達の方に身体を向けた。彼女は切れ長の緑の瞳でラウルスの目をじっと見る。ラウルスも彼女の瞳から目を逸らさない。
　風がラウルスとプルウィアの金髪をなびかせる。ヴェルジュは今にも慌てふためきそうな顔で彼らを見ていた。ラウルスとプルウィアの間に、非常に険悪な空気が流れる。
　だが、プルウィアは何も言わずにくるっとまた向きを変え、歩くことを再開した。ラウルスも何も喋ることなく、ただ彼女の後ろをついていく。ヴェルジュはぽかんとしている間に置いて行かれそうになっていることに気づき、ラウルスの後を追った。
「ここが、あなた方の宿泊する宿になります」
　そう紹介されたのは、明らかに旅人が安易に泊まることができない、あまりに豪華な宿であった。市民が宿泊する、という点ではそれほど高級な宿ではないが、できるだけ旅費を抑えたい旅人

では、滅多に泊まることは出来ない場所だ。ラウルスは呆れているが、ヴェルジュはただ、あんぐりと口を開けている。プルウィアはくすりと笑い、呆然としているヴェルジュの肩を叩く。

「ヴェルジュ様、といいましたね？　どうぞ気を楽に。ランダ帝国はラウルス様だけでなく、あなたも歓迎いたします。まずは部屋に荷物を置いてゆっくりお休みになられるといいでしょう」

その優しい言葉に、ヴェルジュは頷いて答える。先ほどまで彼女に対して抱いていた敵対心に似た感情は、どこかへ行ってしまった。なんとなく、彼女は姉のような雰囲気さえまとっている。それでもヴェルジュの中にある、プルウィアから見た自分はラウルスのついでなのかもしれない、という疑念は消えることがなかった。

三人は宿の従業員に案内されて、一つのドアの前に案内される。従業員が鍵をかちゃりと開けると、広い部屋が視界に入る。テーブルも椅子も格式が高く、正面には大窓が作られていた。窓の外に出るとバルコニーがあるようだ。壁の方に目を向けると、絵画が飾られている。ヴェルジュにはその価値が分からなかったが、よくできた絵ということは分かった。プルウィアは二つ並んだ扉のうちの一つのドアノブに手をかける。

「わたくしも監視……もとい護衛のために同じ部屋に泊まりますが、この通り壁と扉で隔たれてはいますので、どうかご容赦ください。レオン皇帝はラウルス様にご執心なのです」

「正直そのぐらいは覚悟していたから、今更だ」

プルウィアは申し訳なさそうに言ったが、対するラウルスはこの手の待遇には慣れているらしく、割と淡白である。確かに、この部屋は本来、家族で都市を訪れた人々向けの部屋らしく、ラウルスとヴェルジュが二人で使うには広すぎる。元からこういう魂胆であるらしい。ヴェルジュは、ラウルスがランダ帝国経由で旅をしたがらない理由がなんとなく分かったが、そもそも「ランダ帝国現皇帝・レオン」が何故ラウルスにこだわっているのかということが理解できない。そのことを嫌々半分に察したラウルスは、それでも優しくヴェルジュの疑問に答える。

「……荒野でも話したと思うけど、クエルチア王国とランダ帝国は何度か戦争になっている。その時、あまりにランダ帝国がしつこいものだから、父さんがランダ帝国をこてんぱんにしてさ。一人の死人もださない魔法だったにしろ、ここの歴代皇帝はいまだにそれを根に持っているというか……軍事力として父さんを迎え入れたいばかりに、俺を利用しようとしているってところだ」

早口でそう言ったラウルスは本当に心底嫌そうな顔をしている。どうやらミラのために利用されることが気に食わないらしい。

「まあ、他の街を見るのも、一つの勉強みたいなものだから、ヴェルジュにはちょうどいいと思うぞ」

ヴェルジュは、そう言ったラウルスの方を向いて、頷いた。プルウィアはそれを微笑ましく眺めていた。プルウィアのその微笑ましくも、観察するような視線にラウルスは目ざとく気づく。まるでそれは、ヴェルジュの品定めでもしているかのようであった。しかし、悪意によるものではない。彼女はどこかつかめない魔法使いである。

しばらくの間、三人は部屋でぼんやりと過ごしていた。ラウルスとヴェルジュは同じ寝室で、プルウィアはその隣の寝室である。

ヴェルジュは寝室のベッドで、ゴロンと横になった。非常に柔らかな布団が敷かれている。村が運営する宿駅のベッドとは比べ物にならない。

そしてヴェルジュは、ラウルスが言っていたことを思い出す。

――ラウルスはプラエクラールムにいた時から、ミラという存在とひとくくりにされていた気がする……ヴェルジュの心の中に、そんな考えが浮かぶ。

ラウルスの「救えなかったこと」、そして「父親のミラ・メンス」という二つが彼の中の闇を引き出している？　そういえば、プルウィアが『騎士・ラウルス』として過ごして欲しい」と言った時、彼は急に顔色がよくなったような……

そう思っても、やはり何も分からなかった。そもそも「救えなかったこと」の詳細が分からない状態では、それ以上のことは知ることができない。そこで考えは行き詰ってしまった。

一方のラウルスは鎧を脱ぎ、部屋に備え付けてある椅子に腰かけて、テーブルの棚にあった本を手に取って読んでいる。その様子を目の端でとらえたヴェルジュは、ベッドから起き上がると、ラウルスの後ろに立って、本を覗き込んだ。だが、その内容があまり分からない。

「……昔と、ところどころの文法が違うわ。これじゃ、読めない……」

「五百年も前じゃあ、そういうこともあるか……」

ヴェルジュが落ち込みながら言うと、ラウルスはそう相槌をうった。

ランダ帝国は元々クエルチア王国と接していた土地を発祥とするため、使用される言語はクエルチア王国とほぼ同じ「ディエース語」である。違いと言っても、強弱のつけ方など、方言程度の違いしかない。だが、本など文字を記すということになると、クエルチア王国とランダ帝国のものに差は全くと言っていいほど存在しないのだ。

それでも五百年前となると、ディエース語自体が現代のものと異なっている。ヴェルジュは村人達が話すのを聞いて、「話す・話される現代ディエース語」は聞く分には理解できるようであったが、書物を通す必要のある「記す・記される現代ディエース語」は読むことができないらしい。それは仕方のないことではあったが、この先、冒険をするには非常に心配なことでもある。

ラウルスは、父親であるミラが古ディエース語で話すことから、ヴェルジュの話し方を全く気に留めていなかった。しかし意識して思い返してみると、確かに彼女の話し方は非常に古ディエース語訛りが強い。彼女と会話を交わしたモデストゥス村の人々は、ミラが古ディエース語で話すことから、聞き取りも慣れていた上、そんなミラの息子の知り合いが古ディエース語を話してもあまり気に留めていなかったようだ。しかし、文化の割に建国されてそれほど長くないランダ帝国では通じないかもしれない。

「なら、俺でよければ教えてあげるよ。父さんは昔のディエース語を話すから、よく質問していたんだ。昔と文法が違っても全部が全部違うわけでもないから、コツさえ覚えれば、すぐ読めるようになるさ」

ラウルスはヴェルジュに、横に座るように言った。ヴェルジュは頷いて、部屋にもう一つあった椅子を持ってくると、ラウルスの横に座る。

「まず、ここの部分だけど……これは昔のディエース語だと――」

ラウルスが説明する間も、ヴェルジュの頭の中には別の事が巡っていた。

――ラウルスは、ミラのことを嫌っているわけではないのだ。こうして、顔色を変えることなく、彼のことを口にすることができる。しかし、何故かラウルスは時折、彼の存在に怯えているような、そんな気配を感じていた。

「……ヴェルジュ?」

ヴェルジュは自分の名を呼ばれて、はっとした。ラウルスが自分の時間を削って説明をしてくれていたというのに……そう気づいて、ごめんなさい、とヴェルジュは謝罪した。

「いや、俺も勝手に説明してしまったし、こちらこそすまない」

ラウルスは少し申し訳なさそうな顔で微笑んだ。ヴェルジュは首を横に振って、謝らないで欲しいという意を表す。そしてヴェルジュは説明の続きを頼み、ラウルスもそれに答える。

ラウルスの説明は非常に分かりやすい。父親であるミラは古ディエース語を話し、モデストゥス村の人々は現代ディエース語を話すことから、彼はどちらも分かるし、話すことができる。ただ、普段話す際には、古ディエース語を理解できる人間の少なさから、

専ら現代ディエース語を使っているようであった。ヴェルジュは何とかその説明についていっているが、染み着いた訛りばかりは、一朝一夕に直せるものではない。

「まあ、気長に身に着けていくしかないな」

ラウルスは笑いながら、ヴェルジュにそう言った。そうこうしているうちに、リビングから何かいい香りがしてきて、夕食の時間になっていることに気づく。プルウィアがドアをノックして、二人に夕食の時間を告げた。

「一旦休憩だな、続きはまた明日にしよう」

ヴェルジュは、今の時代には明かりもあるのに何故明日なのか、と疑問に思ったが、その理由はすぐに分かった。二人はプルウィアに続いて、夕食の席に着く。ランダ帝国の夕食は、クエルチア王国とは違い、かなり簡素なものだ。小さなパン、数本のソーセージと数個チーズ……簡素も簡素である。

「まあ、この国では夜は寝るだけの時間、って考えだからな。夜に多く食べる必要はないと思われているんだよ」

なるほど、これが国による違い、その勉強……ヴェルジュは呆然としてしまう。ヴェルジュが最初に生きた時代も、夜に多く食べることはなかったはずだが、しかしそれでも、もう少し食べていたと考え直す。

「……わたくしも、ランダ帝国に来たばかりの時は驚きましたよ」

もう慣れましたけど、とプルウィアが大きなため息をつく。魔法使いの隠れ里も、クエルチア王国式の食事らしい。食事の前に、三人は太母神クーナエに祈りを捧げる。この風習は同じようだった。

――その深夜、ヴェルジュは喉が渇いて起きだしてしまう。ランダ帝国都市は、荒野から離れているが、どこか空気が乾燥しているようだった。前日にほとんど寝ていないラウルスを起こさないようにそーっとドアを開けると、テーブルに置かれた水差しを取ろうとする。

その瞬間、ヴェルジュはリビングに置かれた長椅子の上に、何かの気配を感じた。むしゃむしゃと、咀嚼音が聞こえてくる。目が慣れてきて、黒い影が長椅子に鎮座しているのが段々はっきり見えてきた。

「……ヴェルジュ様ですか?」

長椅子にいる影に突然声をかけられ、ヴェルジュは驚き、おのいた。あまりに突然のことに、声すらでない。だが目を凝らして見てみると、プルウィアが何か焼き菓子のようなものを両手で持ち、隠れるように貪っていたのだった。

「見つかって、しまいましたね」
赤面するプルウィアだったが、ヴェルジュは状況をつかみきれていない。
「夕食時には『もう慣れた』と見栄を張ってしまいましたが……この通り、いつも深夜のお菓子をいただいている、ということです」
そう言って、プルウィアは手招きをした。どこかいたずらな笑みを浮かべている。ヴェルジュは困惑しているが、どうしても逆らうことができず、彼女のそばに寄る。さらにプルウィアは、ちょいちょい、と自分の横を指さし、ヴェルジュを座らせた。何をされるのか分からないまま、彼女の横に座ったヴェルジュを確認して、プルウィアは満足そうな顔を浮かべる。プルウィアは手に持っていた菓子を手で一口大に割ると、ニヤリと笑ってから、ヴェルジュの口の中にねじ込んだ。ヴェルジュは思わず、もがっ、と変な声をあげてしまう。その様子をプルウィアは、くすくすと笑って見ているが、悪意によるものではないことは何とか理解できた。もっとも、それに限りなく近いものではあるのだが……。
ごくん、と菓子がヴェルジュの喉を通る。
「ふふ、これで共犯です」
子供のようにいたずらっぽく笑うプルウィアを、ヴェルジュは目をまん丸にして見ている。どうやら、彼女は思っている以上に愉快な人間らしい。
三人は起きてすぐに、用意されていた朝食の席に着いた。温かいスープにパン、ソーセージに果物がそれぞれ皿に盛りつけられている。夕食よりは量があるが、それでもクエルチア王国式より遥かに少ない。
「この国では、昼食に重きを置いているのですよ。だから、朝食と夕食にはあまり量を食べないのです」
そう説明するプルウィアに対し、ヴェルジュの視線はやけに冷たい。昨夜のことがあればそれも当然と言えるかもしれないが、それを知らないラウルスには、何故ヴェルジュがこのような顔をしているのかは分からなかった。
朝食を食べた後、プルウィアは自分の寝室にこもり、ラウルスとヴェルジュは昨日の勉強の続きをしていた。ヴェルジュが目の前にしているのは「ドラゴンの基礎」という題名の学術書である。内容が難解である上、使われる学術用語も独特であるため、ヴェルジュは眉間にしわを寄せながら本を覗き込んでいる。
「『ドラゴンは高貴な身分の女性、特に王女などの地位の女性を攫う傾向がある。その結果、人間によって……』えっと……？」
「『討伐され、女性は救われるか、あるいはすでに殺されているか

である』だな。討伐のところは少し難しかったか？　もう少しだから頑張れ」

分からない部分をラウルスが代わりに読むと、ヴェルジュは頷いてもう一度本に向かう。あと数行でページが終わるところだ。ラウルスが見守る中、ヴェルジュは文章に目を通す。

「『時代を経て、ドラゴンはその数を減らしたが、現在においても森や山の中の洞窟に住む個体も存在する。時折、ドラゴンが巣を離れ、街を襲うという事例が発生している。その目的は不明であるが、捕食ではないかといわれている。しかし推測に過ぎない』……というところかしら」

「ああ、今のところは全部ばっちりだった」

ヴェルジュは年齢だけに覚えが早く、この二日で何とか子供向けの本程度なら、一人で読めるようになっていた。今読んでいたような、少し難しい文法が使われる本も、ラウルスと共にならば何とか読むことができる。ただ、古ディエース語訛りの矯正だけは、もうしばらくかかりそうであった。

「ドラゴンって、今でも街を襲うの？」

本を読み終えたヴェルジュは、その内容について素朴な疑問を投げかける。ラウルスは腕を組んで悩み始めた。

「そうだな……少なくとも俺は見たことがない。父さんならあるのかもしれないけど、人生で一度でも遭遇したら多い方、ってところじゃないか？」

つまり、ドラゴンが街を襲うことは滅多にない、ということだ。そう説明されると、途端にヴェルジュの心の中に何かが渦巻く。遭遇することはほぼない……と理解していても、突如として襲われることがあり得るということは、ヴェルジュに漠然とした感情を与えた。

ヴェルジュは幼い子供が甘えるようにラウルスの服の袖をつまむ。その行動でラウルスはヴェルジュの中に渦巻くその感情に気づいた。

「不安、なんだな」

ヴェルジュはラウルスの言葉に首肯することもできない。それほど、彼女の心は「不安」に塗りつぶされていた。そんなヴェルジュを見て、ラウルスは村の子供にするように彼女の頭を撫でる。

「大丈夫だって、ドラゴンはもうほとんど生き残っていないっていうのは本の通りなんだ。それに、そうなったら俺がヴェルジュを守るよ」

ラウルスに頭を撫でられたまま、ヴェルジュは頷く。彼に撫でられると、不思議なことに不安はどこかへ行ってしまった。ラウルスは微笑んでヴェルジュの頭から手を離す。そして、ヴェルジュ

の前に置かれた本をもう一度手に取り、まじまじと表紙を見る。
「でも、二日だけでここまで読めるようになるのは、やっぱり才能だと思うけどな」
俺だったら無理だ、とラウルスは椅子に座ったまま伸びをした。
「ラウルスの教え方が上手いのよ」
ヴェルジュは少し顔を赤らめながらラウルスをそう褒めた。彼もまんざらではないようで、少し得意げな顔になり、そして面映ゆそうに赤面する。
ふと、ヴェルジュはこの赤面を最近どこかで見たような気がした。恥ずかしがる赤面……だが、思い当たる節はなく、思わず考え込んでしまう。ラウルスはそんな様子のヴェルジュを不思議そうに眺めている。だが、すぐに何かを思い出した様子になり、崩していた体勢を戻すと、机に片肘をついた。
「ああ、あとは地理とかも覚えておくべきだな。さすがに五百年前だと、関りのない国のこととか、あまり気にする時代じゃなかっただろ？」
以前、ヴェルジュは「クエルチア王国」を「クエルクス公国」と呼んでいたが、それはサンセール村がクエルクス公国の領地であったから把握していた国であり、他の国に関しては、そもそもさっぱり分からなかった。昔の村人は住む村に縛られ、移住と職業の選択の自由がなかった。そのため、他の国など知る手段もあまりなかったし、知る必要もなかったのだ。
「今は移動手段とかが発達しているし、村人も比較的気楽に旅ができるからな。他の国との交流なんか、昔とは比べ物にならないんだ。覚えとかないと、どやされるぞ」
そう言って、手を伸ばしたラウルスは机の本棚から何故か妙に分厚い地図を取り出して、ヴェルジュの前にドン、と置いた。ヴェルジュの表情は明らかに嫌そうだ。今、やっと現代ディエース語を習得したばかりだというのに、また課題を増やすというのか……ヴェルジュの顔はそう言っている。
そんなヴェルジュに助け船を出すかのように、ドアをノックする音が聞こえてきた。二人は同時にドアの方を向く。ラウルスが返事をすると、プルウィアが顔を見せる。
「ラウルス様、ヴェルジュ様。この宿は昼食を街で楽しんでもらいたいという方針ですので……そろそろ街へ出て、昼食を調達しに参りましょう」

プルウィアに連れられて、二人は街を歩く。昼食時になったことで、来た時よりも香ばしい匂いが街に充満している。店の前に置かれた木製ベンチに座った若い娘の集団が、透明なグラスに注

がれた色鮮やかな飲み物片手にお喋りに興じている。働き盛りの男達が、豚のあばら肉にかぶりついている姿も見える。昼間の街というのは非常に活気にあふれた場所だ。ヴェルジュは鼻をくんくんと動かし、興味深そうにきょろきょろ見渡している。その様子を後ろから眺めるラウルスもプルウィアも微笑ましそうに見ていた。

「ヴェルジュ様、何か食べたいものなどありますか？」

　プルウィアにそう問われ、上機嫌だったヴェルジュは、ぴたりと立ち止まり、考え込んでしまう。ヴェルジュはすぐ横にあった店を見た。鮮やかな食材が使われた料理が並べられている。食べ物を出す屋台を見て、おいしそうだと思えども、見たことのないものばかりである。それはランダ帝国という異国の土地柄か、あるいは時代の違いというものか。名前も分からないし、上手く説明できる気もしない。

「……今の食べ物は、何があるか分からないわ」

　その言葉を聞いて、プルウィアは不思議そうな顔をした。答えに対する疑念もそうだが、これまで言葉を交わさなかったヴェルジュの話し方が、古ディエース語訛りであることに対する感情も含まれているようだった。ラウルスは事情を説明しようにも、そもそもどこから説明するべきなのか分からない。プルウィアは少し考え込んで、ヴェルジュの瞳を覗き込む。

「ヴェルジュ様、少々失礼いたします」

　プルウィアはそう告げると、ヴェルジュの頬に手を当てて固定するようにした。彼女のエメラルドの瞳が、ぼう、と光る。魔法が発動された時の、独特な空気感。何かを見透かすように、エメラルドの瞳はヴェルジュの双眸を見つめる。きょとんとした顔で、ヴェルジュは彼女と目を合わせていた。ヴェルジュには、何が起きているのか分からなかったが、プルウィアの方は段々と顔をしかめていく。

　やがて光が収まると、プルウィアはどこか苦しそうな表情で胸元を抑えながら、ラウルスの方を見た。ラウルスは眉をひそめながら黙って頷く。プルウィアは耐えきれず頭を抱えた。

「惨すぎる……こんな……」

　恐怖にも似た感覚から汗すらながすプルウィアに、ラウルスがハンカチを差し出した。プルウィアは礼を言ってそれを受け取ると、あふれ出る汗を拭く。膨大でありながら、あまりにあっけない終わりの繰り返しの記憶は、見ていて面白いものではない。しかし、これは本当にあったことであり、そしてヴェルジュが抱える苦悩でもある。

　プルウィアは気持ちを落ち着かせ、ヴェルジュに心配をかけま

いと、すぐ元の表情に戻って微笑みかけた。
「……それでしたら、わたくしが気に入っている店のパンなど、どうでしょう？　レーズンとナッツの塩梅がちょうど良いのです。バターは多めがおすすめですよ」
ヴェルジュの目が輝く。あれほどの過去を持ちながら、ただの少女としての反応を見せるヴェルジュを、プルウィアはどう思うのか。しかし、自分のお気に入りの店に興味を持ってくれたことを嬉しく思っているらしい。彼女は優しく微笑んだ。
「もっとも、ここまで無邪気になるまでは、酷いものだったけどな」
「ええ……容易に想像できます」
ラウルスがひそひそとプルウィアに耳打ちすると、彼女は頷いた。魔法使いという職業柄（種族）、彼女も人間の限界というものをよく理解している。人間の限界を知る以上、ヴェルジュの置かれていた境遇から立ち直ることは困難であるということも熟知していた。
「彼女がここまで人間に戻れたのも、あなたがいたからなのでしょうね」
そう言われて、だといいんだけどな、とラウルスはヴェルジュを見た。プルウィアの言っていたパンを楽しみにしているのか、やたらそわそわしている。彼女は出会った時よりも表情豊かになっていた。
「ラウルスは何を食べるの？」
弾んだヴェルジュの声を聞いたラウルスは、少し考えてから屋台を見渡して、何かを探す仕草をする。
「俺は……たまにはエールでも飲みたいな。串焼きでも付け合わせにしてさ」
「あの……まだ昼間なのですが……」
プルウィアは呆れ半分、止める気持ち半分でそうぼやいた。返答を聞いたヴェルジュもあ然としている。二人はラウルスを止めたかったが、彼はプルウィアに向かってニヤリと笑うと、屋台へと向かって行ってしまう。
「こっちはランダの都合に振り回されて、足止めをくらっているんだぞ。ここの滞在中は、ほぼ休暇みたいなものだ」
やれやれ、とプルウィアが肩をすくめる。こうなった以上意地でも俺は酒を飲む、とラウルスは近くにあった屋台でエールと串焼き、チーズなどを頼み始めた。平時の鎧姿ならともかく、鎧を脱いで、深緑のシャツと白いズボン姿のラウルスは、いかにも昼間から酒を飲んでいそうな風体のようにも見えてしまう。ヴェルジュはぽかんとその様子を見ていた。
ヴェルジュの中のラウルスには、いつも明るい口調で話しながらも、陽気と言うよりかはどこか堅物そうな雰囲気があり、酒な

どにはこだわりを持っていなさそうな印象があった。しかし、いたずらっぽく笑い、喜々としてエールを頼むラウルスは、どこか楽しそうに見えた。

ラウルスは、優しい。しかし、それだけではないことを認識する。

（……ラウルスって、そんな一面もあるのね）

――思わず、笑みがこぼれた。それをヴェルジュは自覚することはない。しかし右手にエール、左手に串焼きの乗った木皿を持って戻ってきたラウルスは、思いがけずヴェルジュの笑みを目にすることになり、驚きを隠せなかった。そして半開きの口から言葉がもれる。

「ヴェルジュが、初めて笑った……」

そう言われて、ヴェルジュは口元を押さえた。自分でも信じられなかったのだ。

「笑った？　私が……？」

ヴェルジュはラウルスの顔を見た。半開きの口で、ぽかんとした表情。これ以上油断すると、グラスも皿も落としてしまいそうなぐらい呆然とした、間抜けた顔になってしまっている。

それを見て、再び口元が綻ぶ。今度は、声を出して笑ってしまった。

「あははっ……なあに、ラウルス……なんなの、その顔……！」

おかしくて、腹を抱えて……奇異なものを見るような周りの視線も気にせずに笑ってしまう。人から見れば、ラウルスの表情などなんてことのないものだというのに、まるで何かの糸が切れたかのように、ヴェルジュは大笑いしていた。

大笑いするヴェルジュを眺めて、ラウルスとプルウィアは顔を見合わせていた。プルウィアはラウルスの立場を庇うように肩に手をのせつつ、耐えきれずに笑いだしてしまう。

「俺、そんなに変な顔してたか？」

笑う彼女達を前にしてラウルスは苦笑いした。変よ、とヴェルジュは言い、いまだに笑いを止めることができない。自分が笑われているにも関わらず、ラウルスは不快には思えなかった。

街中の広場の噴水の側にあるベンチで食べる昼食は格別だった。ヴェルジュを真ん中にして、彼女の右側にラウルス、左側にはプルウィアが座って、三人で仲睦まじく団欒の時をすごす。ヴェルジュは、バターをたっぷりとのせたパンを頬張り、満面の笑みである。年相応……というよりは、もう少し幼い少女のようにも見えた。おいしいわ、おいしいわ、と無邪気に喜ぶヴェルジュを見ながらラウルスは笑うと、串焼きを横向きにして、炭火で焼かれた豚肉を一切れ口にする。

「気に入ってもらえたようで、何よりです」
見た目は静かに振舞っているプルウィアであったが、自分のお気に入りが他人にも理解してもらえたことが嬉しくて落ち着かないらしく、どこかわさわさとしている。だっておいしいのだもの、とヴェルジュは笑顔でそう言った。
「お土産も買ったのだから……また夜にこっそりと食べましょうね、プルウィア」
「ちょっと、ヴェルジュ様……」
プルウィアの制止も気にせず、ヴェルジュは意味ありげにラウルスに笑いかけた。ラウルスはその意味を図りかねている。気にしないでください、とプルウィアは慌ててヴェルジュの口に自分のパンを放り込んだ。彼女にも守るべき面目はあるのだった。少なくとも、あのような強がり半分の見栄を張った手前、夜食を食べていることなど知られたくはないのである。ヴェルジュはパンを咀嚼して飲み込むと、そんなプルウィアを笑った。
「ずいぶん笑うようになって、本当によかった」
ラウルスはエールを飲みながら、ヴェルジュに微笑みかける。ヴェルジュは笑顔で頷いて、ラウルスとプルウィアを見た。
「笑うと……なんだか心が楽しいの。不思議ね、ラウルス」
穏やかでありながら、どこか強い意思すら感じられるその口調は、以前のヴェルジュならば想像できないほど、明るい少女そのものである。ラウルスは我が事のように嬉しく思う。今のヴェルジュは以前の彼女より、よっぽどよかった。

（……俺は、どうなんだろうか）
ヴェルジュを眺めるラウルスの中に、過去の記憶がよみがえってくる。ヴェルジュと出会ってから、ラウルスもまた、己の過去を反芻し続けていた。
ヴェルジュを、過去の少女と重ねているわけではない。それでも、過去が自分を追いかけてくる。「救えなかった過去」が、自分の心から消えてくれない。それは贖罪の心でもあり、また現実逃避にも似ていた。
プラエクラールムに戻った時、ラウルスは同僚の騎士からも、師であるモンターニュ侯からも逃げ出した。
（ヴェルジュは、変わったんだ）
ラウルスの頭の中で、再びそんな思いがよぎる。
彼女は、もう以前の彼女とはまるで違う。長いような、短いような時間の中で、ヴェルジュはこんなにも変わっていった。
（俺は何も変わっていないじゃないか）
あの時から、救えなかった時から、自分は止まったままだ。

――変わっていく彼女。変わらない自分。このままでいいのかと自問自答する。でもどうすれば。

無邪気にパンを頬張るヴェルジュの横で、ラウルスは陰鬱な顔のまま、串焼きを口にする。そして、残っていたエールを飲み干した。透明なグラスの底に映る自分の顔を見て、また嫌な気持ちになった。

「……。」

プルウィアは、そんなラウルスに何か思うところがあるようだった。

（続く）

※本稿は、一部表記の訂正を加えた作品を抜粋したものです。

（二〇二一年度卒業）